

《2005年2月例会報告》

【日 時】2005年2月20日（日）17：00～19：00（→その後、同じところで2次会 ～23：00）

【会 場】RICE+（ライスプラス） 東京都墨田区京島1-18-8

【参加者（会員）】中塚義実（筑波大学附属高校） 中村敬（緑ヴェルデユースSC） 岸卓巨（DU
Oリーグボランティア） 山中麻耶（YMCA健康福祉専門学校・YMCAスポーツ専門学校） 田
中理恵（株式会社日本能率協会総合研究所） 藤田稔人（レフェリー）

【参加者（未会員）】今井悠子（日本社会事業大学大学院） 信太奈美（埼玉県総合リハビリテーショ
ンセンター・筑波大学大学院） 野崎浩之（立教大学3年）

【テーマ】地域社会に見る障害児スポーツクラブの意義

【報告者】中村敬（緑ヴェルデユースSC）

【報告書作成】藤田稔人（レフェリー）

注）参加者は、所属や肩書きを離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあく
までもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定す
るものではありません。

地域社会に見る障害児スポーツクラブの意義

中村敬（緑ヴェルデユースSC）

<目次>

I. はじめに

II. プレゼンテーション（中村敬）

1. 障害者と接したことはありますか？
2. 障害者のスポーツ環境
3. トラックスの概要
4. トラックスの特徴・活動における意義
5. 緑ヴェルユースSC vs FCトラックス 交流試合（平成17年1月30日）
6. クラブスポーツの展望

III. ディスカッション

IV. 報告者（藤田稔人）の感想・意見

I. はじめに

嘉藤（ライスプラスの管理者）：ここは2年前にオープンし、若いアーティストに使ってもらったり、
昼間はカフェをやっています。今までもイベントや地域の会議に使ってもらっています。今回、サ
ロンで使いたいということで、これを機会にご理解いただきたいと思います。

皆さんサッカーに興味があるということで、向島にもスポーツに興味ある方がいるので交流して
いただければ、よろしく願いいたします。

中村：嘉藤さんは地域でも活動しています。自分もカフェにけっこう顔を出します。写真を展示していたり、いろいろおもしろいことをやっていたりします。ではまず、それぞれ自己紹介を。

中塚：その前に嘉藤さんに、サロンがそもそも何かを申し上げていなかったですね。

サロン 2002 は、活動自体は 10 年以上やっている任意団体です。サッカーに興味のある研究者の定期的な集まりが最初ですが、90 年代に入る頃からどんどん広がっていき、いろんな人が関わるようになってきました。最初はサッカーだけでしたが、ハンドボールや水泳などいろいろな種目の人が集まるようになり、最近は“アート”にも手を出そうとしています。

月に 1 度の月例会が活動の柱で、会員がテーマを持ち寄ってディスカッションしています。メインがその後の呑み会だったりもしますが…。「出張サロン」と称して地方へ出かけることもあって、去年は伊香保や愛知県半田市に行き、現地の方と交流しました。今回の企画担当は中村さんで、彼がコーディネーターのときは川向こうでやることが多く、「下町サロン」と称して 3 回目になります。

サロンは会員制の組織で全国に百数十名の熱い志を持った人がいるのですけれども、月例会は会員の紹介でどなたでも参加できます。私は代表の中塚です。筑波大学附属高校で保健体育の教員をやっています。

岸：今年からサロンに参加している中央大学の岸です。DUO リーグのボランティアとして審判をやったりもしています。よろしく願いいたします。

今井：信太さんから話をいただき、来ております。私は車椅子バスケットボールに関わっていました。

今、福祉系の大学院に通っており、最後の報告書のテーマが、障害者スポーツを地域で振興するということです。今回の話が興味深かったので参加させていただきます。今井と申します。よろしく願いいたします。

信太：私も会員ではないのですが、電通の相原さんと筑波大学の大学院体育研究科の健康スポーツマネジメントの方で活動しており、その紹介で参加させていただきました。埼玉県総合リハビリテーションセンターで理学療法士の仕事をしています。あと、障害者スポーツ協会のアンチドーピングオフィサーや車椅子バスケットボール連盟の事務局の強化指導に所属しております。障害者のスポーツをこれからどうしようかということで活動しているので参加させていただきました。どうぞよろしく願いいたします。

山中：山中です。YMCA の健康福祉専門学校というところで教えています。生徒が障害児の水泳教室をやっているのは見ているのですが、私自身は障害児にあまり教えたことがないので、生徒が知っているのに私が知らないのはどうかなと思い、勉強させていただこうと思い参加しました。

出身校が筑波大附属なので、中塚先生には教育実習などでもお世話になりました。それで参加するようになりました。よろしく願いいたします。

野崎：立教大学 3 年の野崎と申します。まだ未会員ですが、長谷川君の紹介で来ました。大学のサークルではフットサル大会の運営をやっており、サークルだけではなく地域の商店街の方々や小学生も集めており、今日の会合にはとても興味がありました。どうぞよろしく願いいたします。

田中：田中です。私はサッカーの写真を撮っています。プレーヤーの写真を撮るだけではなく、育成や普及に興味がありサロンに参加しています。大学のダイビングのクラブでは後輩達を教え、大学

の外でもお客さんを相手にガイドをしていました。見るのが好きなサッカーでどのように指導・普及するのか興味があって来ています。お願いします。

藤田：藤田と申します。サッカーのレフェリーをやっています。障害者福祉には、去年1年間、電動車椅子サッカーに関わっておりました。今年は電動車椅子サッカーのレフェリーの資格もとり、その他にもCPサッカーなどいろいろあるので、それらの資格もとり、ユニバーサル・レフェリーを目指そうと思っています。よろしくお願いします。

中村：中村と申します。墨田区の本所（南部）地域で少年サッカークラブのコーチをやっていて、より良いクラブを目指し活動しています。仕事は、介護老人保健施設で高齢者の介護職をやっています。障害者スポーツでは、スペシャルオリンピックスという知的障害者のスポーツプログラムにも関わっていました。

今日はトラッソスというチームのスタッフをお呼びする予定でしたが、所用により来られず、私だけになってしまいました。話題提供ということでよろしくお願いいたします。

II. プレゼンテーション（中村敬）

1. 障害者と接したことはありますか？

テーマは「地域社会に見る障害児スポーツの意義～知的障害児サッカークラブ・トラッソスの活動から」です。トラッソスとは、2、3年前、私がフリーターをやっていた時期に出会いました。ボランティア・コーチとして週1回関わるようになり、先日、私がみている健常児のサッカークラブと試合をしました。その中から、地域社会にみるスポーツの意義ということで発表します。

まず、皆さんは、障害者と接したことはありますか？

私の小学校には障害児学級はありましたが、特にそのクラスと交流を持った覚えはありません。同じ建物にいても、全然接したことはありませんでした。

障害者は、身体障害者・知的障害者・精神障害者に分かれています。東京都福祉保険局のホームページからの資料によると、いろいろ細かく定義されています。地域で生活する中で、彼らを言葉で理解しても、本当に理解したことにはなりません。文字で捉えることでもないし、IQや名称などで分けるものでもありません。しかし、障害者と接する機会がほとんどないから、このように説明するしかなくなります。そこで今回は、知的障害児を対象にしたトラッソスの活動を紹介します。

知的障害者の数は、東京都が発行している「愛の知的障害者手帳」の交付数でみると5万4千人くらいです。この数で言えば、東京では230人に1人の割合です。「愛の手帳」を交付する過程で、いくつか審査を受けなければなりません。「愛の手帳」を交付されていない軽度の人もあります。軽度でなくても、親がそのような審査を避けていることも多くあるそうです。230人に1人となっていますが、もう少し割合は大きいかもしれません。

知的障害児の生活を健常児と比較すると、幼児期までで、健常児は地域社会の中で自然と可愛がられて大人と接する機会があるけど、障害を持っている子はなかなか外に出られない、あるいはそうせざるを得ないような状況が、物理的にも、親御さんの精神的にもあり、家の外の環境に触れる機会が少ないと思います。

今、幼稚園は統合されつつあり、障害児も一緒にやっているところもあるそうです。小学校のときは「障害児学級」というクラスがあり、「通級」という、週に数回は障害児学級に通うクラスがあります。あとは障害レベルが重いと養護学校。青年期で就職できる子はほとんどいません。法定雇用率と

いうのがあり、それは 1.8%という規定ですが、それを下回る現状で、一般社会には出られないような状況があります。

小中学校では健常の子どもは習い事もいっぱいありますが、障害を持った子には用意されていないというか、ない環境です。最近は障害児の学童クラブのようなものが増えているようです。ただ、学校を離れたところにそのような環境がないというのが現状です。

問題点として、まず第一に、地域社会に障害児と接する環境がなく、ゆえに差別や先入観、誤解されたままの障害者観を生む結果となっています。

第二に、学校以外の環境がなく、守られた環境のみで育てられるので、外に出るための自己判断や自己主張する力、行動力が育たないことが挙げられます。前の会社で、重症心身障害者の通所サービスにいました。そこで 20 歳くらいの方に対応していたのですが、その方は小さい頃から養護学校で育ち、そのまま直接、施設に入りました。会話して理解し、コミュニケーションをとる能力はあるのですが、その人は野球が好きでも実際に自分からやろうとか観に行こうと言うことがありません。「できないから」という言葉が先に出てきてしまうという問題があります。

三番目に、地域社会に障害者と接する環境がありません。子どもだけではなく家族にとっても、所属するコミュニティが形成されず、世間話をするような場所が失われがちです。親が子育てや障害をもつ子の親としての悩みがあっても、それを打ち明けたり、話したりする環境がないのです。

それに関して、児童相談所の一般相談件数（電話ではなく直接、相談する）は知的障害者の相談割合が 34%（以前は 40%以上だった）、介護保険と同様に障害者に対する支援費制度もできて、ガイドヘルプが付けられるようなシステムになり減ったそうです。

私たちも障害者と接する環境がない。これからは障害者を含む地域社会で、ゆたかな生活に向け、スポーツはどのような意義をもつだろうかということです。

スポーツ観の確認の意味で、中塚さんの資料から引用します。「これからのスポーツ観」は、学校・企業から地域へ、「する」のみではなく「する・みる・語る・ささえる」多様な価値観、いろいろな楽しみ方があります。

2. 障害者のスポーツ環境

障害者のスポーツ環境の大まかな現状です。障害者スポーツと言ってイメージされるのはパラリンピックでしょうが、パラリンピックはあくまで身体障害者のトップアスリートの大会です。その中に知的障害者は入っていません。アテネパラリンピックでは、バスケットボールと卓球のみが公開競技としてありました。

トップアスリートではなく底辺の部分では、スペシャルオリンピックスというのがあって、2月26日から長野で知的障害者の世界大会があります。冬季ナショナルゲームというのが開かれます。オリンピックのあとに「ス(S)」がついているのは、トップアスリートの競技会だけでなく、日常的なスポーツプログラムを大切にしよう（日常的なプログラムは1回のオリンピックの価値に相当する）ということで複数形になっています。参加国はパラリンピックに加盟している国の数より多く、去年はアイルランドで夏季の世界大会がありました。日本ではまだあまり認知されていませんが、ネルソン・マンデラやシュワルツネッカーも応援し、かなりの認知度があります。スペシャルオリンピックスは大企業がスポンサーについており、アスリートは東京では年間 1000 円で1年間、いろいろなスポーツプログラムに参加できます。

その他の問題として、スポーツがあっても学校や養護施設中心ということが挙げられます。養護学校にはクラブ活動があり、ある養護学校には球技部というのがあって、サッカーの大会があるとサッカーの練習をし、別のスポーツの大会があるとそのスポーツの練習をします。私がいた施設でも、障害者スポーツ大会があって、大会に向けてプレイする選手を募って、大会に向けて練習をする、大会中心の感じがありました。それはレクリエーション中心、スポーツをする楽しさのみで、上手くなる楽しさを味わうことができません。教えるにしても健常児に比べて時間もかかるし、専門的なスタッフもないので、上手くなる過程がありません。学校中心なので、地域においていろいろな人々が支えあうようなクラブがなく、「する」のみのスポーツ観です。スポーツをする場所があっても、知的障害を持つ子どもの親がやっていて、障害者同士のプレー機会しかなく、健常者と交流を図る機会が少ないのです。

3. トラッソスの概要

トラッソスの概要です。このクラブは吉澤さんと藤沼さんという2人の方が中心となり、中学校の障害児学級の非常勤職員として働きながら、運営しています。普段から障害児と接している方です。その他にボランティアコーチが15人います。クラブの理念を理解して参加しています。

このクラブは学校の組織やクラブ活動ではなく、普段活動している江東区を中心に6つの区から子供達が集まってきています。障害児学級だけではなく養護学校の子どもなど、いろいろなところから来ています。FC東京と提携し、FC東京が調布で行っているサッカークリニックのアシスタントコーチや現場のアドバイス等にも関わっています。

4. トラッソスの特徴・活動の社会的意義

トラッソスのクラブ理念は、1つは知的障害児へのサッカーの普及・育成。単にサッカーを提供するだけでなく、上達の過程までを含めたサッカーの普及・育成です。2つ目は積極的に健常児との交流を図り、障害児の社会進出・障害者理解の普及で、サッカーをするに当たって、自分のことは自分ですということです。そして3つ目は、知的障害者の精神的自立を目指しています。

バリアフリーやユニバーサルデザインという言葉がありますが、これはハード面に着目した発想です。トラッソスはパンフレットにあるように、知的障害者対象ということで、心・内的な部分のケア（心の成長）を含めたソフト部分に着目し、文化におけるバリアフリーとユニバーサルデザインを目指しています。

この活動の社会的な意義として、まず、障害児には学校以外の環境がほとんどないので、非日常の選択肢の1つとしての意義があります。2つ目は、上達する過程を含めて「できる楽しさ」を育て、自己主張の育成における意義、3つ目は、挨拶や道具の片付けなど、身の回りのことは自分で行うことを学習することで、社会性や行動力の育成を図ることがあります。4つ目は、学校ではないので、地域の方と一緒に取り組み、ファミリーを含んでのクラブづくりといった意義もあります。家族にとっても「見る・支える」という楽しみ方の他に、自助グループとしての機能があり、同じ悩みをもつ親が集まって交流のきっかけになります。5つ目に、健常者との積極的な交流により、文章だけではなく体験から社会へ求める障害者理解としての意義があり、6つ目に、サッカー大会の開催ーコパ・トラッソスという交流目的の大会を主催していますが、ライン引きや運営も、そこに参加している子どもたちがやっています。勝ちを求める大会ではなく、交流が目的の大会を主催する中で様々なこと

を学ぶことができます。

5. 緑ヴェルユース S C vs F C トラッソス 交流試合 (平成 17 年 1 月 30 日)

中村：先日、このようなトラッソスと交流試合をしたので、その映像を流します。(以下、映像を観ながらの議論)

中塚：トラッソスは知的障害の子どものクラブですか？

中村：脳性麻痺の子どももいますが、知的障害の範囲には入りません。脳性麻痺の子どもも対象にはしています。試合会場は養護学校です。トラッソスがいつも使っているところです。

中塚：どのような障害を持っているのですか？

中村：愛嬌がよくて明るい性格の、ダウン症の子どもたちや、自閉症の子もいます。自閉傾向というくくりもあります。脳性麻痺の子もいます。

中塚：このチームにもいるの？

中村：います。

それから、トラッソスの中には、健常の子も、障害を持っている子の兄弟が 4 人入っています。

(映像を観ながら) コーチはオーバーアクションで分かりやすく説明しています。

私のチームでは、今回の試合をするにあたって、事前に、親に、障害を持った子たちと試合をするということを伝え、障害児の方が学年は上ということや、勝敗だけでなく、言葉を交わさずに通じ合えることがスポーツの意義にあるのだということなどを説明しました。

トラッソスの練習に何回か参加して思うのは、トラッソスの活動を通じて、子どもたちの表情や反応が変わってきていることです。

岸：子どもたちは会話できるのですか？

中村：コミュニケーションはとれることはとれるのですが、会話するとふざけてしまったり、自閉の子は自分のこだわっている言葉を言いだしたりします。話を聞かせるという、待つ姿勢を、スタッフ全員で共通理解を持って徹底しています。

こちらは幼稚園児から 3 年生です。

じっとしていてもブツブツいう子もおり、反応が明らかに違います。

中塚：今からサッカーの試合をやるというのは分かっているのですか？

中村：分かっています。

信太：サッカーのルールに対する理解はどのくらいですか？

中村：なかなかできない子もいます。ゴールラインを割るとゴールキックだということがわからない子もいます。この試合ではコーチが後ろにつきながらというのも OK です。審判も、教えながらやりましょうというスタンスです。すぐに理解するのは難しいですが、やりながら教えようとしています。

円陣を組むように促しているところです。

私も障害児を教えていたことがありますが、ボールを蹴ることはできても、ドリブルしたり、ボールを奪ったりすることがなかなかできません。

中塚：なぜ？ ルールがわかっていないわけではないでしょう？

中村：ルールはわかっていると思います。

藤田：日常生活との混同があって、日常生活で「他人のものをとってはダメですよ」と言うと、サッ

カーでボールをとるのもいけないと思ってしまうのではないのでしょうか。

田中：病気の種類にもよると思いますが、私の先生（心理学）が統合失調症（以前は精神分裂病と呼んでいた）に詳しい先生だったのですけれど、自分と外の上手くつかめない人がいるそうです。自分の敵か味方か把握できない可能性はあります。子どもだから余計に難しいのでしょうか。自分でボールを運ぶことができても、あっちに人がいるから使おうとはなかなか思えないのでは。そのようなことを普段からなかなか考えられないのであれば、そのようなことを考える訓練としてはいいのかなと思います。

信太：知的障害の子は、身体の障害がなくても、身体を思うように使えないということもありますよね？

中村：身体を使いこなせないようなことはありますね。この試合もこちらが勝つのですが……。

中塚：王子養護学校は知的障害児を受け容れていますよね？

中村：はい。このクラブは王子養護ともよく試合をしています。王子を使って活動もしているのかな。

中塚：うちの学校（筑波大学附属高校）に王子養護学校の先生が知的障害を持っているサッカー部員を連れて来て、何回か練習をやったことがあります。全く遜色はなかったですね。プレイも普段の様子も、この子のどこに障害があるのかと思っていました。

中村：知的障害にも幅があって、ADHDやLDという程度の障害もあります。

早送りをして、印象的なシーンを…。

少年サッカーで一般的に練習（交流）試合をしていても、勝利至上のお父さんやお母さんがいて、試合に熱中しすぎたり、罵声？応援？と、どっちかわからないような声も飛んだりします。

（映像を観ながら）今回は、最初お互いベンチが離れていたのですが、時間が経つにつれて、日陰が迫ってくるというので、徐々に両チームとも、日向の残りのところに動いていき、この日向のところまで来て、最後にはベンチが一緒になってしまいました（笑）。罵声はなく、ほほえましい笑い声が聞こえて、楽しい雰囲気でした。

私が主審をしていたときには「マクドナルド」と何回もいう子がいました。おそらく試合が終わったらマクドナルドに連れて行ってくれるということだと思います。手を繋ぎに来る子もいました。

10番の子は4歳でダウン症です。10番の子がコートの外に出て行ってしまう。うちのチーム（健常）の子どもたちがコートの中に戻るように誘い、僕も促そうとしましたが、トラッソスの吉澤コーチから「中村君」と声がかかり、子どもたちがせっかく自分たちでやっているのだから、子どもたちにやらせようということで、見守ってあげることにしました。

中塚：お父さんのところに行っているのですか？

中村：他の親御さんですね。

中塚：この人は？

中村：ボランティアスタッフのコーチです。

子どもたちが話を聞くまでには時間がかかります。時間はかかりますがこのようにやっています。日々の練習でもそうしています。

このような感じで試合をしました。この後、グラウンド整備を一緒にやりました。

次は3月15日に「コパ・トラッソス」があり、そこにも招待されており、今後もクラブ間で交流しようということになっています。

6. クラブスポーツの展望

中村：最後に、これからのクラブスポーツの展望ということで、普通のクラブはクラブの中だけに目を向けていますが、その他にどうクラブを育てていくかということを考えています。トラッソスの活動を見て、スポーツ観や障害者観をクラブの外に向けて積極的に情報発信しているという印象を受けます。この試合のように、クラブ同士が深く関わることで相乗効果が上がると感じます。

一つのクラブだけでなく、クラブ同士の交流試合もあるのかなと思いました。子どもたちの交流試合だけでなく、家族を含めた、プレイ以外の交流のかたちもあるのかなと思いました。交流試合をした後で、こちらのお父さんたちにはすごく感謝されました。おそらく、養護学校が自分たちの地域にあるというその存在さえあまり意識していなかったと思われそうですが、養護学校の中でやったのも、ひとつの意義になったと思います。

総合型スポーツクラブの話もたくさん出てきていますが、ハードやシステムだけでなく、ソフト面でどのように関わっていくかをディスカッションの中で考えたいです。

最後に、お金の話をすると、受益者負担のため、トラッソスもお金の面では困っています。お金を確保するためにスポンサーになってくれるようなところにアクションもしています。会員になってもらう際には、基本的には無料トレーニング体験を何回かしてもらってから、月謝等の金額と照らし合わせて、納得した上で登録していただく、という形をとっているそうです。

Ⅲ. ディスカッション

中塚：じゃあフリーでディスカッションしましょう。

藤田君が言った、障害者サッカーの審判資格というのはどういうものですか？

藤田：電動車椅子サッカーには、独自の審判資格制度があります。普通のサッカーの審判をわかっている方が理解は早いようですが、電動車椅子サッカーのルールは、普通のサッカーとは違います。パワーサッカーとも言って、バスケットコートでやり、ボールも10号球ですごく大きいですね。

その他に、例えば、脳性麻痺のCPサッカーは、サッカーの審判の資格を持っている人が、その他に講習を受けているようです。ただ、ブラインドサッカーや聴覚障害者のサッカーは、2級審判に割り当てが来ていることもあります。

中塚：ブラインドサッカーは見えている人が入っていないなければならないとかあるんだよね？

今井：弱視がキーパーです。

信太：ブラインドサッカーは5人制。CPだと7人制。障害者のサッカーにも4種か5種類くらいあります。

中塚：それはどこかが定めているの？

信太：IPCが定めている。

中村：団体が分かれているなというイメージがあって、豊者のスポーツ大会にはデフリンピックというのがパラリンピックとは別にあって、理念が違うので一緒になっていない。

中塚：5、6年くらい前にJFA（日本サッカー協会）の人と話していて、障害者のいろいろな大会があって、それに後援申請が来るのだが、後援を出しにくい。なぜなら、団体が乱立しているので、どこどどのように組んだらいいのかわからないと言っていましたね。

中村：障害者スポーツ協会がやっている障害者スポーツ指導員という講習があります。3年位前の話ですが、私が受けたときに、そこではスペシャルオリンピックスの活動には全く触れていませんでした。

信太：私もスペシャルオリンピックスに行くのですが、支援している組織が全く違って、交流がないですね。

中村：ないですね。本当に交流しようとしていないのでは？

トラッソスの吉澤さんがやっているハンディキャップサッカーとかも違うのでしょうかし、車椅子に乗って手でやるサッカー大会も参加したことがあります、あれはどこの主催だったのかな…。

中塚：W杯のときにも何かやっていたでしょ。

中村：アイナスですね。

中塚：新潟の大橋君が仕切って日本代表をつくっていたのは、知的障害のサッカーでなかったっけ？

中村：そうかは分かりませんが、知的障害者のサッカーで、国際的なアイナス（INAS-FID 国際知的障害者スポーツ連盟）というところで、あそこに参加している子どもたちは普通に会話できたり、技術もかなり高いですね。トラッソスの吉澤コーチは、その大会以降、日本代表の臨時コーチもやっています。確かあの時は、味の素スタジアムで決勝やりましたね。

今井：ちょっと話を逸らしてしまいましたが、脳性麻痺の子もいるし知的障害の子もいると話されました。さっきのビデオくらい落ち着いて体操ができない子が「入りたい」と言ってきたときには、全部受け容れるのですか？

中村：他人に危険を及ぼす可能性がある場合には、受け容れられないようです。詳細はよくわかりません。

→ 「状況によります。他害がある子も在籍しています」（トラッソスに後日確認）

今井：基本的には受け容れる方向ですか？

中村：はい。重度の子も受け容れているし、この日は来ていなかったけれども自閉の重い子で、サッカーをするまでいっていない子も受け容れています。サッカーを通じて社会的に自立できるようにはしています。サッカーをできる、できないで判断はしていないと思います。

今井：さっき子どもたちの反応が変わってきていると言っていたのは、具体的に言うとは？

中村：トラッソスのスタッフは、「感情の表現が表れてきたこと」と話していました。

その他にも挨拶や荷物運び、ゲームが終わったらゴールを片付ける。そのようなことはパッとや

るようになりました。

あとコーチが言っていたのは、健常者と交流試合をすると、学校ではいじめられる子でも、健常の子と同じ土俵に立てる、サッカーを通じて試合ができて、自信が持てるということです。

中塚：障害者だけのスポーツクラブは他にもあるの？

中村：聞いたところによると、大人になると養護学校の部活のOB会のようなかたちで、知的障害者の作業所の施設の中でチームをつくったりしているようです。いろいろなところから参加するようなクラブはないようですね。

中塚：これは非常に珍しいケース？

中村：珍しいですね。

中塚：海外はどうなんですか？

信太：海外は普通にあるところが多いです。特にドイツではサッカーだけでなく、障害者がスポーツをする権利が認められているので、障害者もスポーツできるクラブがあります。

中塚：欧米では、クラブの中に障害者をもった人もいます。障害をもった人だけが独立してクラブをつくるのではないのではないかと理解しているのですが。

中村：トラッソスは葛飾区の立石に健常者のチームも持っています。障害者のサッカークラブにも障害を持っている子の兄弟が何人か入っています。完全に閉ざしているわけではありません。バーベキューや合宿もやっています。

中塚：ここはいわゆるサッカークラブで、そこに障害者部門もあるということですね。

中村：以前はそうでしたが、現在は知的障害児クラブに健常部門があるとお考え下さい、とのことです。

今井：障害児というのは何歳までですか？

中村：案内では紹介していないかもしれませんが、確か規定はないはずです。

今井：今いる子どもが、年齢が上がっていったときは？

中村：ユース（高校生～一般）のカテゴリーがあります。

信太：このクラブに入ってくる生徒の情報は口コミですか？

中村：どこから情報を得ているのかは分かりませんが、養護学校に配っていると思います。お母さん方のネットワークを通じたり。

障害児の学校以外の活動でお金をとるということに、今までは悪いような感じがあって、ほとん

どありませんでした。スペシャルオリンピックスもほとんどタダ。ボランティアスタッフで行ったときには、障害児だから安くというのではなく、お金をしっかり取る代わりにしっかりしたものを提供しますと言っていました。

中塚：これに関わっている人たちは、基本的な収入は学校の非常勤で賄っていて、その余力で活動しているのですか？

中村：トラッソスの活動が余力ではなく、非常勤の方が余力です。ゆえに法人化するそうです。あと、クラブの会費だけではなく、F C東京からどのくらいもらっているかはわかりませんが、サッカークリニックみたいなことは頻繁にやっています。Jルーツという他のスポンサーが絡んで、知的障害者のサッカー教室をやるようなことを言っておりました。そのような活動も収入になっているとは思いますが。

中塚：つまり、この業務提携というのは、F C東京の活動を請け負っているわけね？

中村：そうだと思います。F C東京には障害児に対するノウハウが少ないから…。コーディネートやアドバイスをしている感じでした。

中塚：NPO法人になって対等の関係になれば、トラッソスももっと名前を出せるよね？

中村：そうですね。

中塚：山中さんのところの学生さんもこのような仕事に就いている子がいるの？

山中：私は水泳しか見ていないのですが、マンツーマンでやっています。それは実習も兼ねていますが、リードしているところだと思います。セントラルの友だちは、自閉症の子も一緒に見えています。今日の話聞いてみると、過保護すぎるかなと思います。YMCAの方針としては、自立させるために、それでできる子は集団に上げていこうということです。

中塚：学校においても永遠のテーマだよね。インテグレーションなんて言っているけれども、本当に障害者と健常者が一緒に学びやっていくのが、お互いにとっていいことなのかということもあるよね。

→ 「全て、同じ考え方で行うから無理がでるのでは。その子にあったものを与えられるシステムが出来れば」（トラッソスより）

田中：水泳は、水の事故があるから最初は1対1ですよ。

山中：でも外のプログラムもあって、障害児を連れて行くときにもマンツーマンです。

中村：試合後にうちのクラブの子どもに感想を聞くと、「楽しかった」「強かった」とか、普通の答えが返ってくる。今までなかったことだけれども、普通にできたことが嬉しかったですね。

中塚：修士論文は何をやっているの？

今井：来年から障害者のスポーツ振興の仕事をします。身体・知的・精神で全然ニーズが違うんですね。パラリンピックの影響もあるけれども、身体障害者の子どもは知的と重複でなかったり、あるいは相当の重度でない限り、自分たちでそれなりに活動していける地盤が元々あります。でも、知的や精神は当事者だけで何かをやらなければならないので、難しい環境の中で、パラリンピックのように観て理解されるような機会もない。そのような意味でニーズが違うので。それをどうやって盛り上げていけばよいのか。

今日話を聞いて、「クラブチームかぁ」と思っています。教員やリハビリセンターの人ではなく、スポーツ方面から入った人がもう少し目を向けてくれて、上手く共存してくれると、子どもは同じスポーツをしている仲間として捉えているのだから、障害者として捉える必要はないのであって、同じスポーツを楽しむ仲間として入ってもらえともうちょっと違うのかなと思っています。

中村：吉澤コーチが言っていたのは、学校や施設中心のスポーツ環境は、スポーツ知識の低い親が主体であったりする。そうすると、スポーツの多様性や価値が失われてしまったり、わかりやすく言うと勝利至上になってしまったりする。あとは障害者の親同士で集まって、そこから外へ出せない。

今井：親の負担もあるし、知的のスポーツはボランティアの人数も必要だったりします。家族だけでやるには限界があります。

信太：総合型地域クラブがありますが、障害者も障害者の中だけではなく、総合型クラブの中に入っていけるのが理想だと思います。でも、このようなことは珍しくて、成人になった人たちがようやくやろうとしているくらいで、知的は養護学校のOBで固まって国体に出ようなどころから抜け出せない。障害児に関しては、養護学校でその子に合ったスポーツを提供しかねているところもあります。スポーツは地域からという方向になることを望んでいます。

嘉藤：素晴らしいな、皆さん熱心だなと思います。

昨年、知的障害者が作品をつくるアート工房があって、設立当時は自立するための施設だったが、その後、他に行くところがない。スポーツは将来、参加し続けることも可能だし、何らかのかたちで指導にまわられるし、後輩を育てることもできる。社会参加への可能性はないのか。そのような希望…、上の段階を目指せないのか？

アート工房の場合は、社会参加させるために展覧会で作品を販売し、なかなかそこまでは行かないが、職業として自立できるようにする。他にも絵画として雑誌に掲載したり、社会に自分のつくったものを還元できるという環境をつくろうとしている。

スポーツをして楽しいし、仲間が増えるということも大切だが、それ以上に参加する意義を理解できればさらに広がっていくのかな。

中塚：アートというのはよくわからないけれども、自閉の人に絵画の才能あつたりするじゃないですか。ある部分ではものすごい才能があつたりするけれども、障害者のスポーツになるとそれがどう結び付いて、職業として、社会的な価値となるのか議論されていないですよね。

今井：習い事と一緒になんだと思いました。普通の子どもが全員ピアニストになるわけではない。そこで何かを身につけるのかということ、継続性だったり、音楽を好きという気持ちだったりするわけで、サッカーをそのような習い事的な活動と捉えるのか、もう少し大きく広がりを持たせるのかというのは、どうなんでしょうか？

藤田：競技スポーツを目指すのであれば、やはりカテゴリーを分けないと成功しないでしょう。逆に生涯スポーツとして捉えるのであれば、今の話のようにクラブで囲って、カテゴリーなしで健常者と一緒にやればよい。そこでどのような分け方をするかは、初めから分けてしまうのか、そうではなくて初めは一緒にやって後から分けていくのかというのがあって、今日の話ではその後の受け皿もまだできていない段階にあるということですよ。

電動車椅子サッカーは、健常者と一緒にやりましょうと言っても、健常者の方が明らかに下手なんです。健常者は電動車椅子を操作できないし、そうかといって電動車椅子に乗った人と電動車椅子に乗らない健常者が一緒にサッカーをしても、電動車椅子に乗らない人は怪我をしてしまう。カテゴリーを分けなければならないこともある。

何でも一緒というわけにはいかない。ただ、今は受け容れがあまりにも少なすぎる。

岸：現在、障害者がプロでスポーツをしているのは？

中村：海外では聞いたことがありますね。アイナスで聞いたことがあるなあ。

信太：知的障害者のW杯にも出た、本当のプロチームから声がかかった人がいる。車椅子バスケットボールでは、アメリカにはプロがありますし、イタリアにもあったと思います。それを職業としてやっているのは、車椅子マラソンの方。個人では日本にもいます。日本ではリーグとして成り立っているのはありません。

中塚：身体障害は分かりやすい。アスリートとしてできなくなっても指導者として支える側になれるような気はする。今日の知的障害だと、最後の出口がどこにあって、次のステップがあるわけでもない。分かりにくいですね。

中村：身体障害者のスポーツで、児童期にクラブやスクールのような環境があるんですか？

信太：ありません。

中村：中途障害の方だったら、自分から動くということも知っています。先天性の子はそのような環境さえ知りません。

信太：養護学校は守られた中で育ってきています。外部からの刺激がなくて、社会に出て初めてどうしようとなってしまいます。私の務めているリハビリセンターでは、1年間の過程があります。自分で判断する、挨拶をしようとか。「赤と青、どっちがいい？」と聞いても、自分で選ぶことができず、親が「赤でいいじゃない」と決めてしまう。知的の子も子どものころから交流があって、選択する機会ができると違うのかな。

中村：問題ですね。

信太：そのような意味では、海外の障害児と比べると、チャンスが多いか少ないかで差が出てしまう。スポーツでは、本当はもう少しできるのにということがあっていいのではないのでしょうか。

山中：養護学校のほうが、アフターケアがいいのではないですか？

信太：守られているというよい面もあります。いつかは社会に出なければならなくて、両親が自分より先に亡くなってしまうことを考えると、他の人と暮らしたり、少しでも接する場面を増やさなければなりません。

中村：吉澤さんが言っていたのですけれども、作業所で働いて給料を得ても、それを使う場所も使う手段もない。そのような意味でも、クラブの参加費に使って欲しいという意味もあり、お金をとる。お金の使い方を知らない、お金を使う場所がない。

山中：養護学校が社会に適用するために進めていくべきなのか、それとも、一緒に進めていくべきなのか？

信太：よいところと悪いところがあって、全てを一緒にすると問題が出てくる。その目的だと思います。養護学校卒用のプログラムでは、テープカッターの使い方を教えたり、お小遣い帳をつけている。他の子と同じように経験しなければならないこともあります。

健全者でも障害者と一緒に何かをやった経験がない人もいます。社会の中にはそのような人もいて、一緒に暮らしているということを知りません。一緒にスポーツをした経験がないと、大人になったときに「別なもの」という意識が強くなってしまいますので、お互いに重なり合う部分が必要ではないでしょうか。

中村：先日、吉澤さんと話していたのですが、スポーツをする以外にも交流をしたほうがよいと思います。いつかトラツツスでもバーベキューやキャンプをやって、障害児にご飯をつくってもらって、こちらは吞んで食べるだけということをしてみたいです。

中塚：一緒にやるところと別にやるところとが両方あったらいいですね。

中村：では、7時なので…。とりあえず1次会は終了とします。
引き続き、この会場で、2次会です！

中塚・藤田：ここからさらに濃くなっていきますよ！

IV. 報告者（藤田稔人）の感想

従前の障害者福祉は、地域社会に開かれておらず、障害者を学校や施設に困ってしまう閉鎖的なものであったと理解している。また、スポーツクラブを含め「クラブ」という文化（社会構造）そのものが、日本では定着していない現状である。ゆえに、クラブにおける障害者スポーツというテーマは、先駆事例なのだろうと思いながら報告を聞いていた。

今後、まずはクラブの内部において、障害者と健全者が協働できるような環境がいつそう求められ、その取り組みが活発になるのだろうと考えた。そして、次の段階として、そのように障害者とともに歩むクラブ間のネットワークの形成が課題となってくるのではないだろうか。障害者も含むクラブは、健全者の文化の成熟に応じて、遅ればせながら定着するのだろうと思われるが、そうなることを期待している。

以上